

仮名の特質の解明からデジタルフォントの開発へ



研究者氏名

すずき ひろみつ
鈴木 広光

所属機関

奈良女子大学研究院
人文科学系

関連キーワード(複数可)

印刷史 デジタル書誌学 文字論 活字書体史
フォント・デザイン

主な研究テーマ

・嵯峨本『伊勢物語』の活字規格と組版を、デジタル書誌学の方法によって解明。
・仮名という日本特有の文字の文化的特質を、活字化＝技術への適用という過程を通して解明。

主な採択課題

・特定領域研究 平成16～17年度(配分総額:3,800千円)
「嵯峨本の印刷技法の解明とビジュアル的復元による仮想組版の試み」
・基盤研究(B) 平成17～19年度(配分総額:6,570千円)
「平仮名字体・書体の変容と印刷技術および出版メディアとの関係に関する歴史的研究」

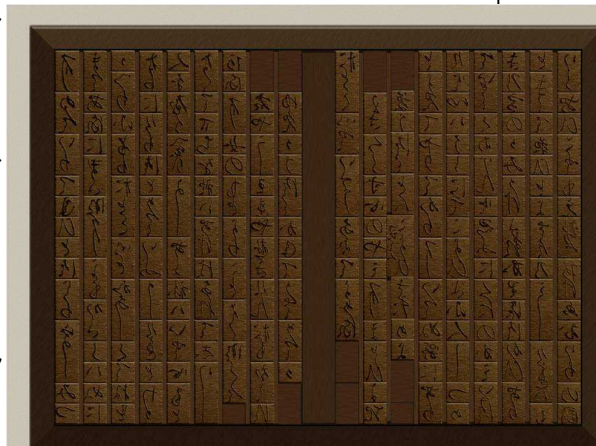
① 科研費による研究成果

【研究の概要】

[問い] 仮名は本来、伸縮自在で文字が連続して書かれるので、文字を規格化する活字と相性が悪い。この制約を技術はどのように克服したのか？
[対象] 江戸初期慶長年間の京都で行われた古典の活字印刷事業「嵯峨本」のひとつ『伊勢物語』は、仮名の優美さを残しながら、活字化に成功した日本書籍史上、最も美しい印刷本。その仮名書体の美しさの理由を探る。
[方法] 嵯峨本『伊勢物語』の活字書体のデザインの特徴を指摘するため、その版面をデジタル画像に収めて精査するデジタル書誌学の方法で、活字規格と組版、活字の数と種類、活字書体の特徴を明らかにする。

【研究の成果】 (図はCGIによる活字組版推定図)

・嵯峨本『伊勢物語』の活字規格は、全角の整数倍。字間を調整しないベタ組み。約2,100字種の活字が印刷に使用された。
・嵯峨本『伊勢物語』の仮名書体は、活字規格の空間を有効に使って、仮名の伸縮自在さの再現に成功したことが明らかになった。
・仮名書体の基礎資料として、「嵯峨本『伊勢物語』印字標本集」を制作。これは異版の多い嵯峨本『伊勢物語』の刊年と第何版かを決定するための資料として有用。



② 当初予想していなかった意外な展開

・2011年3月10日『日本経済新聞(朝刊)』『日経アート・レビュー』に「嵯峨本の謎」と題して、嵯峨本の活字書体と組版の解明および嵯峨本活字書体のデザインの特徴に関する研究成果が紹介される。
・グラフィック・デザイナー永原康史氏とフォント・デザイナー鳥海修氏(字游工房)に研究成果の「嵯峨本『伊勢物語』印字標本集」を提供、両氏はこれをもとに「嵯峨本フォント」を2012年開発、発表。その際、嵯峨本仮名書体の特徴についても、アドバイスした。同プロトタイプ版は、Web上でフリー・フォントとして公開、好評を博している。(図はその一例)



<http://epublishing.jp/sagabon/>

③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

・嵯峨本フォントは、デジタル・フォントによる日本語表現の新しい可能性を示す試みとして注目されている。
・仮名本来の特質や美的特徴を古い文献資料に探り、これをデジタル・フォントで再現することは、最新技術と歴史的伝統との融合という点でも有意義である。